

白百合女子大学 博士論文審査報告書

氏 名	毛 莉
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第 52 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	主 題 日本語教育の視点から見る日本語の「の」と中国語の「的」 副 題 中国語母語日本語学習者の「の」の誤用を中心に
論文審査委員	委員長 教 授 六鹿 豊 主 査 教 授 足立 さゆり 副 査 教 授 山本 真吾 副 査 准教授 常盤 智子 副 査 中国西安外国語大学教授 母 育新

論文内容の要旨

本論文は、中国語母語日本語学習者（以下学習者）に多く見られる連体助詞「の」の誤用を分析し、その原因を明かし、さらにこれを基に日本語教育現場での「の」の指導法を提案するものである。

「の」に関する研究は、主に「の」の過剰使用を中心にした研究が従来からされており、この誤用の原因は母語の干渉であるとされることが多い。これは中国語には日本語の連体助詞「の」に相当する「的」という語があり、日本語の教科書にも日本語の「の」は中国語の「的」に相当すると解説されている。過剰使用に関しては「の」の不使用という逆の場合も見られ、母語の干渉だけでは説明できない部分もあることから、本論文では、学習者にとっての「の」の習得が困難となっている原因の一つは教科書の提示にも問題があると考え、日本語教育の立場から考察する。

本論文は、第 1 章から第 8 章に至る構成とする。

第 1 章では本研究の意義と先行研究について述べ、研究方法は、研究の基となる誤用の実態を把握するために、どのケースにどのような誤用がどのくらいみられるかを、中国の大学で日本語を専攻とする 1 年生から 4 年生の学習者約 1000 名余りを対象に「の」に関するアンケート調査を行い、その結果から誤用の詳細と傾向を分析・考察するという流れである。

第 2 章では、日本語教科書における「の」の提示内容を、中国で作成された教科書（『新編日語』『総合日語』『標準日語』）及び日本で作成された教科書（『初級日本語』『日本語初歩』『みんなの日本語』）を対象に、「の」の提出順および提出課とその文法解説を中心に調べ、以下のことが明らかにしている。中国で作成された教科書には「の」は格助詞として所属・所有・内容・性質・状態・同格等を表し、中国語の「的」と類似しているとの解説があり、これに対し日本で作成された教科書には説明はなく例文よりなっているものが多く、共通しているのは日中の教科書ともに「の」に関しての言及が少ないということである。続いて中国語と日本語の相互の翻訳における「の」と「的」の現れ方から、「名詞＋（の/的）＋名詞」の形を中心に、「の」と「的」の対応・不对応を抽出した結果、日本語の「の」と中国語の「的」は対応するものと対応しないものがあるとし、それらは「の」の必須に対し①「的」の準必須、②「的」の省略、③「的」の不要、④「の」の連続に対し「的」の連続回避などであることを明らかにし、これが十分理解されていないことが誤用につながると指摘している。

第 3 章では、学習者を対象に実施したアンケート調査の結果、誤用率の高い「数量詞（名詞的）＋の＋名詞」（「3人の学生がいる。」）を分析する。この形は、教科書に提示されることが少なく、「名詞＋が＋数量詞（副詞的）」（「学生が3人いる」）が中心に提出されていることによると指摘

している。「数量詞（名詞的）＋の＋名詞」が適切な文脈もあり、この形式を教える必要を説く。

第4章では、学習歴に関わらず誤用が減少しないものに、同格の「の」つまり「N1のN2」（「弟の太郎」）があり、これを他の同格表現の「N1N2」、「N1というN2」と比較しつつ論じ、教科書における同格の「の」に関する説明や提示の不十分な点を指摘している。

第5章では、「名詞」と「ナ形容詞」（形容動詞）を中心に、「の」の誤用を分析する。学習者にしばしば観察される誤用「おいしいの食べ物」「暑いの日」のような「イ形容詞」（形容詞）が名詞を修飾する場合は、学習歴に従いその誤用率が減少しているが、これに対し「ナ形容詞」の場合（「有名の人」）は、学習歴に関わらず誤用率に変化が見られないことに注目している。その要因は、「ナ形容詞」と「名詞」の違いが、連体修飾の場合にのみ、前者は「ナ」（「有名な人」）となり後者は「ノ」となる点であると論じている。しかも「名詞」と「ナ形容詞」の両方の品詞を持つ語（自由の女神／自由な女神）があることから、その習得の難しさを指摘している。

第6章では、主格の「が」（「芥川のが書いた小説」）及び目的格の「を」（「日本語のを勉強を／をする」）を表す助詞の「の」について、日本語学習者がどのように連体助詞「の」を認識しているかを考察する。「が」の誤用については、中国で作成された日本語教科書には「が」と「の」の交替については説明が少なく「の」の使用はあまり見られないという。また「動詞連用形＋名詞」（複合名詞「泣き声」等）についても論じ、この形は一つの単語として提示されているだけであるため、日本語学習者は「子供が／の泣く声」（動詞連体形＋名詞）と「子供の泣き声」（動詞連用形＋名詞：複合名詞）の正しい使い分けができず、「*子供が泣き声」という誤用も見られ混同していると述べている。また「を」の場合も、「～を動作名詞する」（「日本語を勉強をする」）のように目的格「を」の共存は許されないため、「～の名詞をする」（「日本語の勉強をする」）のように「の」が用いられ、このような点も学習者を混乱させる原因であると指摘している。また「が」の場合と同様、「連用形＋名詞」（複合名詞）の場合、サ変動詞「荷作りする」は「郵便袋を／の荷作りを／をする」「を」の位置が可変であるため、「*郵便袋を荷作り」のような誤用につながると指摘している。

第7章では、アンケート調査より、学習者は複数の「の」の使用に抵抗感を持つことが明らかになった。日本語の「の」と異なり、中国語の「的」の連続使用は避けられる傾向によるものと指摘している。日本語の「の」が連続する場合、「の」は必須であるが、中国語の場合、「的」の使用・不使用は任意であるためとし、より実践的な教授法を探ることが今後の課題であるとしている。

第8章では、アンケート調査の中で、本論で言及していない部分について論じ、中国語母語日本語学習者の「の」の運用において、習得している部分と習得していない部分があることが明らかになり、典型的な誤用の一つとして挙げられてきたイ形容詞の誤用率の低いことから、母語の影響だけでは説明できない場合も多くみられることを指摘している。今後日本語教育における「の」の提示及び指導について考慮すべき点の提案を試み、日本語教育に役に立てたいと本論文を結ぶ。

論文審査の結果の要旨

日本語の連体助詞「の」に関わる中国語母語日本語学習者（以下学習者）の誤用は目立つものである。本論文の執筆者である毛莉氏は、「の」に関わる学習者の習得が困難であることに着目し、その問題を解決することを中心の研究課題とした。先行研究を精査した結果、日本語教育の視点から、学習者の誤用の原因を探り、日本語教育現場での「の」の指導法の提案を試みようとしたもので、日本語教育に寄与するものであると評価される。

「の」に関する研究は、主に「の」の過剰使用（「美しいの国」）の指摘を中心にした研究が従来から多くされており、この誤用の原因は母語の干渉（「美丽的的国」）であると指摘されることが多いが、本論文では日本語の「の」と中国語の「的」の対照研究を通して、両者には対応するものと対応しないものがあることが明らかになった。この多様な「の」の用法に基づいて、アンケートを作成し、大規模な調査（中国の大学で日本語を主専攻とする1年生から4年生の学習者約1000名余りを対象とする）を行い、この結果から誤用率の高いものとそうでないものがあることを明らかにしたことは、説得力をもつものと判断される。

アンケート調査から分かった誤用率の高いものを順次に論じている。まず「数量詞（名詞的）＋の＋名詞」の「の」用法である。数量詞については、ほとんどの教科書に「名詞＋が＋数量詞（副詞的）」（「学生が3人いる」）の形で提示されており、この誤用については教科書の提示にも問題があると指摘している。次に同格の「の」については、所属とされる「の」つまり「太郎の弟」は中国語でも「的」を用いることがあるが、「弟の太郎」という同格「の」は、数量詞と同様、中国語では「的」が入ることがない用法であり、学習歴に関わらず誤用率が下がらないことも問題となる。教科書の提示においても、学習者に同格の「N1のN2」を「N1N2」との違いに言及しつつ理解させる必要を述べている。

次に「ナ形容詞」（*「有名の人」）については、「イ形容詞」に比べ、なぜ誤用率が高いかというところに注目し論じている。問題として「名詞」との近似にあると指摘している。また近年、日本でも「子供な私」「ワインな気分」などのように、「ナ」を名詞に付け、帯びた状態や性質を表す表現が見られることもさらに混乱を招いているとし、「名詞」と「ナ形容詞」の両方の品詞を持つ語（自由の女神/自由な女神）のみでなく、このような使い方もさらに習得を難しくしていると指摘している。

「が」「を」からの「の」の誤用については、日本語の助詞は役割により分類され、その使い方は学習者にとって複雑で習得しにくいものの一つであるとし、「動詞連体形＋名詞」（子供の/が泣く声）と「動詞連用形＋名詞」（子供の/*が泣き声）について論じている。教科書には「動詞連用形＋名詞」の形についての分析的な説明がなく、その都度新出語彙という形で提示されていることから「動詞連用形＋名詞」という形は一つの名詞だと認識するだけではなく、その仕組みも修得させなければならないと指摘している。また「サ変動詞」についても「日本語を勉強する」と「勉強をする」と「日本語の勉強をする」とはどのような関連またはどのように区別するのかを日本語教育の現場で教える必要を論じている。

最後に、「的」と比較しつつ「の」の連続使用を考察し、学習者の使用回避の理由は母語からの負の転移にあるとしている。日本語では、連体助詞の「の」で名詞と名詞をつなげ、「の」が連続する場合でもそれを省略できない。しかし中国語では、「的」が連続する場合、意味の理解を妨げない限り「的」の連続使用を避けようとするとし、この「的」を避ける傾向が学習者の「の」の連続使用に影響を与えていると論じている。

以上のアンケート調査による「の」の習得の実態、及び教科書の分析をもとにした考察は、説得力があり、評価できるものであるといえる。中国で日本語教育に携わる毛莉氏は、中国の日本語教育現場における「の」の指導のあり方について四点（教科書の提示、初級の指導、習得しにくい「の」の項目、日本語での会話時の「の」の指導）について提案をしており、何れも妥当なものであると評価できる。

対照研究とアンケート調査により「の」の習得に関する学習者の問題点とその解決法を明確にさせた点は、中国の日本語教育への影響も大きいことから、言語研究及び言語教育への貢献を高く評価し、優秀な博士論文であると判断する。

以上により、審査委員会は本論文が博士（文学）の授与に値するものと認めた。